

齋藤史百首

雨宮雅子 選



齋藤史

白い手紙がとどいて明日は春となるうすいがらすも磨いて待たう

魚歌

たそがれの鼻歌よりも薔薇よりも悪事やさしく身に華やぎぬ

夕霧は捲毛のやうにほぐれ来てえにしたの敷も馬もかなはぬ

定住の家をもたねば朝に夜にシシリイの薔薇やマジョルカの花

遠い春湖に沈みしみづからに祭の笛を吹いて逢ひにゆく

羊歯の林に友ら倒れて幾世經ぬ視界を覆ふしたの葉の色

春を断る白い弾道に飛び乗つて手など振つたがつひにかへらぬ

濁流だ濁流だと叫び流れゆく末は泥土か夜明けか知らぬ

暴力のかくうつくしき世に住みてひねもすうたふわが子守うた

額の真中に弾丸をうけたるおもかげの立居に憑きて夏のおどろや

おそろしや言ひたき事もまをさずろげにはびこれる夏草の色

わが頭蓋の罅を流るる水がありすでに湖底に寝ねて久しき

今に見て居れ今に見て居れといふころさへ飲食の間はしばしゆるびぬ

手を振つてあの人もこの人もゆくものか我に追ひつけぬ黄なる軍列

人も砲車も燃えてたたかふ世に生きて雲の去來のうた歌はしむ

『新風十人』より

墮ちてゆくところの中にくひらか花のごときもひるがへりたれ

鬱々と一日をありて見しものは崩えとどまらぬ夕雲の量

『朱天』

草に土に常に恐れてやすらはぬ蜥蜴は美しき尾をひきにけり

しひて柔和な聲してゐれば修羅なせし内側もややに煙れることし

「香かなる湖」

井戸端に土釜七輪置きしのみを厨となせり日も月も射す

山國は食の乏しき千曲堤の野蒜を掘るも洒落にはあらず

「やまくに」

草の實はこぼれて止まずまかせたるいのちの前に手をつきにけり

未來の世も我に憑きくる生きものの信濃の夜半のこほろぎの聲

「うたのゆくへ」

土耳古青となりたる山の四時過ぎにげにすなほなる食欲ありぬ

白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されたれば眼を開き居り

敗北を覺悟の上につちかへば一花朱なすやわがみじかうた

樹木の根と根がくらくやさしくからみ合ふ關聯を思ひひて昏迷す

花が水がいつせいにふるへる時間なり眼に見えぬものも歌ひたまへな

水鳥の胸におされてひそやかにもり上るとき水は耀ふ

もてあそぶこのひと片は天きらし降りくる雪の中のひとひら

このへんで眼をつぶるべきわが生かと思ははすときの山のむらさき

「第六歌集より」

人も馬も渡らぬときの橋の景まこと純粹に橋かかり居る

樹液のほる春の夜にしていきいきと鎖を切りし犬と少年

金色に樹脂の光れるひるすぎをホップ畑より花摘む聲す

夏の雷すぎてしづくす無花果の若き實とわが犬の耳毛と

「風に燃す」

若き(明治)はたのしかりしや 袖ひろげ上用干せる母の紋服

なかなか隠者にさへもなれざれば 雲丹・舌・臓物の類至つて好む

花のごとく投げ繩の輪を廻しくるたくらみのためくびられやらむ

彈痕がつらぬきし一冊の繪本ありねむらむとしてしばしば開く

ひなげしを水に浮べて來しばかり わがたましひ しきりに緋色

葎草のふみ入りがたきくらき群刈るべく勢ひ研ぐ朝の鎌

燈のとかぬ森の奥よりましぐらにすずめ蛾は來て我に打たるる

かのものら遙けき道をゆきながらときに振向く身内者のごとく

杉いつぼんの短劍となる丘の秀に刺されても敗者とならざる 茜

死者たちの彈く樂音を聴くとして蜻蛉は石に身を寄せぬたり

いめえじのざわざわとして起きあがる 背のたてがみの奮ひ立つとき

たましひよりも濃き紫をしたたらせアイリスの朝のつゆけき詠唱

水銀色の髪となりしかば朱に染めて風に燃さんかな一惜命

ぬばたまの黒羽蜻蛉は水の上母に見えねば告ぐるることなし

水邊の樹しきりに花を降らせつつ透明稚魚を祝福したり

「ひたくれなゐ」

うすずみのゆめの中なるさくら花あるいはうつつよりも匂ふを

前の世に君は刺されてあざみ色の痣の匂へる初夏の首すぢ

埴輪の眼ふたつ穴なしてわらへども母の見えざる眼は笑はざり

かなしみの遠景に今も雪降るに鏝下げてゆくわが夏帽子

山坂を髪亂れつつ来しからにわれも信濃の願人の姥

總身の花をゆるがす春の樹にころろ亂してわれは寄りゆく

くさいろの眼鏡をかけて北國をのぞめば春の留萌港見ゆ

ふたひらのわがへ土踏ますへ土をふまず風のみ踏みてありたかりしを

戀よりもあくがれふかくありにしと告ぐべき 吟へる風の一族

麻痺の夫と目の見えぬ老母を左右に置きわが老年の秋に入りゆく

きさらぎの雪のきららを髪にのせ花冠のごとく羞ぢらひゆけり

一房の藤の垂り花夜の底の地中にふかく伸び入りにけり

ちりぬるをちりぬるを とぞつぶやけば過ぎにしかけの顯ち揺ぐなり

秋急ぐしぐれに濡れて坂をゆく 行きくれ者のわが婆娑羅髪

上膊より断ちしヴィナス その手もて觸れしものみな消えうせしかば

あけがたのわが夢のなか轟然と過去へ驀進しゆきしD51

過ぎてゆく日日のゆくへのさびしきやむかしの夏に鳴く法師蟬

おいとまをいただきますと戸をしめて出てゆくやうにゆかぬなり生は

死の側より照明せばことにかがやきてひたくれなゐの生ならずやも

つゆしぐれ信濃は秋の姥捨のわれを置きさり過ぎしものたち

嘴鳴らし花喰鳥のくるといふ花喰鬼とわれはならむか

空をつかむかたちして我は追ひ拂ふ目の前にとふ蟻子ひとつ

わが耳に山の落葉の音積る これの一夜ののちの百の夜

夏草のみだりがはしき野を過ぎて涉りかゆかむ水の深藍

のちの世にめぐり逢ふとも思へば母の落ちたる臉を撫づる

我を生みしはこの鳥骸のごときものかさればよ生れしことに黙す

すずしくふかきものに還ると濃紺の空に沈みてゆきし夕鳥

これよりはまさに一人の下り坂すこし気ままに花一枝持ち

死にいそぐほどのいのちにあらずしてさくらものちの花のくさるさ

額も鼻も寒き夕よぼたぼたの人情のごとき熱粥つくれ

夕ぐれの秋の光に馬は佇ちながるる風に浄まりゆけり

ひらひらと峠越えしは鳥なりしや若きなりしや聲うすみどり

「ひたくれなゐ」以後

「涉りかゆかむ」

ふるさとを眼和みて語るがありふるさとはいかなる胎内ならむ

心つくしてうたを憎めよその傷の痛みすなはち花となるまで

いささかは言葉に衣を着せて言ふ 女刎頸の友ならざれば

ほととぎすといふ草茂る 天上の聲に鳴きたるもの過ぎてより

人を瞬かすほどの歌なく秋の來て瘦吾亦紅 それでも咲くか

てのひらもて撫づる鏡の中の顔日常を生きてこの面の皮

するすると夕闇くだり見て居れば他人の老いはなめらかに來る

風翩翩 ことばへんぼんたらざるを遠く振りゐる人のてのひら

戀のうた我には無くて 短歌とふ艶なる衣まとひそめしが

『秋天瑠璃』

老いたりとて女は女 夏すだれ そよろと風のごとく訪ひませ

待つ人もあらねば この世自が老もつばらかに眺めつつまゐらう

カラートタンに屋根葺きかへてわれは待つ今年の霰いかに音する

疲労つもりて引出ししヘルベスなりといふ八十年生きれば そりやああなた

人を嫉むことばの何といきいきときららかにあることに驚く

老いてなほ艶とよぶべきものありや 花は始めも終りもよろし

渾身のわざすることもなきわれが身をふるひ鳴く虫をやしなふ

蹶起することもなかりし低さにて光苔絶えずひかり反映しき

思ひ草繁きが中の忘れ草 いづれむかしと呼ばれゆくべし

歌の表記・ふり仮名は原則として歌集に準拠しています。

「何があつても、どさつと腰を据えて、いのちにかかわりあ

るまいと思つていたらよいの。額の真ん中を射たれるわけじ

やないんだから、何も大したことじゃありません」。何年も前

長野のお宅でうかがつたときのこの言葉をいまでも忘れない。

モタニズムを短歌で見事にあらわした若き日の史。二・

二六事件で連座・下獄したもののお歌人の父・瀏を敬愛しそ
の生きざまを見届けた娘・史。信州に疎開して林檎倉庫の暮
らしから再出発した戦後の史。夫と母と二人の二級身障者を

抱えた修羅場でうたう史。老いのひとり身を自在にはばたか

せてなお新境地を拓きつつある史、といったその足どり。

あらためて、スケールの大きな、多面体の歌人の姿を思い

浮かべる。そして歌の達人である以上に、人生の達人として

私は多くを学んできたのだった。

『魚歌』から『秋天瑠璃』にいたる数歌集（単行歌集十冊）

から選んだ私の齋藤史百首である。 雨宮雅子（あめみや・まさこ） 『鷗尾』発行人